



し ぶ どう こう す い せ ん り ゅ う 詩舞道光翠扇流

第57回日本コロムビア全国剣詩舞コンクール決選大会で、門下生から優勝者3人、準優勝者1人を輩出した詩舞道光翠扇流。その強さの裏側に迫りました。

若い世代に 剣詩舞を広めたい

最初は、草の根活動

本流派の後継ぎになる諫山光之祐(本名・高部貢祐)さんは、故郷の下関で長年、老人施設での慰問活動や学校文化祭での公演を行っています。

剣詩舞とは、剣舞と詩舞という二つの舞踊の総称を言います。剣舞は武人の心構えや武士道の精神などを、詩舞は扇を用いて優美さを表現して舞う日本伝統芸道。どちらも漢詩や和歌などの詩に節をつけ歌う吟詠に合わせて舞います。大会では、舞の技量や吟詠の心情・情景をいかに表現しているかが審査されます。

諫山さんは、幼少期から剣詩舞を習い、日本吟剣詩舞振興会主催の中国大会で3位になった実力者。18歳の頃、若い世代だからできる表現を追



▲源平ナイトで見事な剣舞を披露する諫山さん。

「求めたい」と思い、当時の流派を離れて、活動を開始。最初はシーモールで道行く若者に声掛けをし、仲間集めをしたそうです。

全国への挑戦

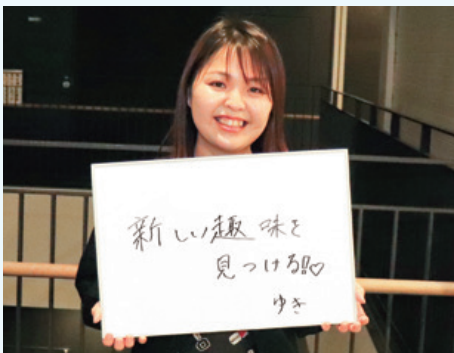
「日本吟剣詩舞振興会主催の大会は流派がないと参加できないんです。当時は流派名を持っておらず、たまたまネットで開催されることを知りまして。代表である私が予選落ちなんて恥ずかしいので、仲間に内緒で申し込みました。みっちり練習を重ね、結果、剣舞で全国優勝することができました。仲間には事後報告です」と明るく話す諫山さん。

当時は、吟詠の先生や本を頼りに歴史を探りながら、作者の気持ちを考えました。詩に合う振り付けを自ら考える時間は楽しく、有意義だったそうです。

現在、諫山さんは本流派の家元から舞に対する努力を高く評価され、後継者に選ばれました。現在は下関市と大分県に門下生がいます。



この春、挑戦したいこと



▶第57回日本コロムビア全国剣詩舞コンクール決勝大会で優勝、準優勝したときの写真。(左から)岡村虹輝さん、阿部相太さん、岡崎羽未さん、北村学さん。当時について、岡崎さんは「たくさんの方に今までの恩を返そうと思い、大会本番に臨みました」と語ります。



◀白虎隊の振り付けを練習中。大会や発表ではどの子も剣舞、詩舞の両方に出場するため、必死に覚えます。

▶お披露目会終了後。両親や兄弟には投票権がありませんので、おじいちゃん、おばあちゃん、学校の友達がお披露目会を見に来ます。票数を多く獲得し、お手製の金メダルを奪い合いました。



楽しみの先には、優勝

稽古の様子を聞くと「私は現実離れた表現は好きではありません。歌を日々勉強し、家元に助言を頂きつつ、リアルを求めた振り付けを心掛けます。そして門下生が、想像できるような伝えます」と真剣なまなざしで話す諫山さん。さらに剣詩舞を楽しむことも重要だと考えていました。「今の子どもにも古典的なことは響かないですよ。楽しさが徐々に興味につながればいいんです。きつい練習もありますが、お楽しみ会や一年間を振り返るお披露目会もあります。門下生自らがお客さまを

Editor's note 編集後記

■下関にたくさんおられる素敵な方たちや取り組み、素敵なモノなどをつなげていきたいと思えます。情報があれば、ご連絡ください！廣野 ■楽器修理の腕前もさることながら、東本さんからは優しさがあふれていました。DIY好きなお母さまも紹介したかったです。宮村 ■剣詩舞の諫山さんが、門下生に「悔しさ、挑戦、達成感」を感じてもらえる裏舞台づくりに尽力されている姿がとても印象的でした。西村

▼稽古を見学可。諫山光之祐 (☎080-1928-9246)へ。招き、マイクを持ち司会や発表をするんです。総選挙のように投票してもらいます。みんなで盛り上がりましょう」 今後の目標を聞くと「この組織は若返りましたが、月日がたてば同じことが繰り返されます。常に子どもたちがいる環境で、活気と活動力がある組織でありたいです。そして、日本吟剣詩舞振興会主催大会での優勝を目指します」 時を経て、若き強い力を携えた諫山さん。これからさらに、詩舞道光翠扇流は一丸となり、次の舞台に挑みます。